

## 大学生の環境認識 自然地理学の講義現場から

藤永 豪（佐賀大学文化教育学部講師 / 元PD） FUJINAGA Go

「田んぼが人工的につくられたことにおどろきました」。

私は地理学を専門とし、これまでいくつかの大学で、地理教育に携わってきた。冒頭の文章は、東京の某女子大学で自然地理学の講義を行った際のある学生の感想文である。この授業では、地形や気候、植生、土壌、水など、自然地理学における基礎的な学習内容とあわせて、「里地・里山」、「雑木林」、「水田の多面的機能」、「環境保全」といったキーワードをもとに、身近な自然環境についても解説してきた。これは、私が農山村に暮らす人々の生活と自然環境との関わり、すなわち生活の舞台としての自然環境の上で、われわれ人間がこれとどのように係わり合い、自らの生活空間をどのように展開してきたのか、ということに研究の主眼をおいてきたことと関係する。

周知のように、里地・里山には宅地を中心に耕作地、雑木林等が配置され、宅地は人々の定住する場として重要な空間であり、寺社等の人々の精神的なよりどころとなる場所も存在する。耕作地は生産活動の場として、農業が営まれ食料を供給する。雑木林からは燃料となる薪材が採集され、木炭の生産の場ともなる。加えて、落ち葉は秋に集められ、糞や自宅で飼育されている牛馬の糞と混ぜられ、発酵させ、翌春には耕作地に鋤き込まれる。地域によっては用水路の底に溜まった植物等の残渣も水中の微生物が分解し、肥料として水田に揚げられる。また、木の実や山菜の採集やイノシシ、野ウサギなどの狩猟が行われる。これは、住民による枝打ちや間伐、下草刈りといった資源としての雑木林の管理の上に成り立つものである。しかも水田にはメダカやドジョウ、ナマズなどの魚類やタガメやミズカマキリ、アメンボなどの水生昆虫、カエルやイモリなどの両生類が生息し、食物連鎖の中で先ほどのイノシシや野ウサギの生息を支えている。さらには人間が意図しないところでも、ミズナラやデンジソウ、オニバスといった現在では絶滅が危惧される植物の生育の場となり、生物の多様性を生み出している。このような形で、人間や生物、その他の有機物・

無機物が互いに結びつきあい、循環し、里地・里山を形作っている。

このシステムは人間が自然環境に働きかけた結果であり、決して何もないところから自然にまかせたままの状態が発生したものではない。しかしながら、先ほどのような、水田がそれこそ太古の昔から今の形態のまま自然に存在してきたと信じ込んでいる学生がいる。田んぼ1枚を切り拓くために、人間がその場所についての水や日照等、自然条件を観察し、どのような判断のもとにどのような技術をもってその土地に挑んだのか、そういった人と自然との格闘や対話にまで考えが広がらないのである。そもそも農業という生産活動を理解していないともいえる。極端に言えば、人間以外の動植物やそれらが生息する空間はすべて天然自然であり、人間とは直接関係するものではないと思込んでいるのである。

「たくさんの森や林が人工的なものだと思って、すごく驚きました。そして、それを管理している人がいるというのも、ビックリしました」このような感想も相次いだ。これは森林の成り立ちと人との関わりについて、植生遷移と人工林を例に話をした際の感想である。山々を覆うスギやヒノキが人間によって植えられたこと、そして、枝打ちや間伐などの作業を行わなければ荒廃し、倒木や土砂流出を引き起こし、洪水とあいまって、ふもとの町に甚大な被害を与えることを知って驚く。そんな反応の裏側には、彼女らにとっての「こんな山奥」に人が住みつき、生活をしていることの不思議さとその営みのあり方によって災害が引き起こされ、その影響が、彼女らが便利で万能であると信じ込んでいる都市生活の日常を脅かすことへの怖さがある。

こういった現象は、われわれ研究者にとっては周知の事実であり、これらを研究対象として、そこからさらに何かを見だし、自然環境と人間との関係を考えていかなければならないものである。しかし、すべてとはいわれないが、学生の中にはこれまで述べたような形で自然環境を認識している者が少なからず存在する。自然環境vs人間という二項対立的な考えをすべてに当てはめ、人間

の居住域にクマやイノシシ、スズメバチが現れるとおののくのである。「閑静な住宅街に謎の生物が！」といったようなテロップを画面に流し、やたら騒ぎまくる夕方のニュース番組を見ていればよく理解できる。もちろん、良心的な番組も存在する。だが、中には前述の自然環境 vs 人間という観点からのみ現象を伝え、逆に野生動物たちのテリトリーに、われわれ人間が踏み込んでいった結果であるという相対的事実が欠落しているものも多くみられる。もともと自然環境との接触が少ない都市で育ってきた若者だけでなく、農山村に住む者たちまでがそういった情報に感化され、自然環境に対する認識の形成に影響を受ける場合もある。実際、学生がこのような番組を見て私に質問をぶつけてくることも多々ある。

先ほどの食料という点でも同様のことがいえる。学生たちはファミリーレストランやファーストフード店で食事をしながら、あるいはスーパーやコンビニエンスストアで買い物をしながら、目の前の食べ物が自分たちの口に入るまでの流れやそこに携わる人々のことを考えたことがあるだろうか。動植物は加工され、原型をとどめない「商品」としてテーブルにあがってくる。その過程は一切見えず、人と自然のつながりを感じることはなく、そこで育まれた民俗や文化を知ることは一切ない。たとえば、ある動物を捕獲するために人間はその生態を観察し、罠を仕掛けるために知恵を絞る。そこには野生と人間との知恵比べが、ローカルな民俗的な科学とでもいうべき知識や技術として現れる。さらに、その動物を捕らえることができたことを海や山の神に感謝し、その肉を喰らい生命をつなぐ。やがて、こうした自然に対する感謝と畏敬の念が生活の中で生まれた時、精神的な文化が醸成されることになる。もっとも、現在では食料の生産・流通システム自体が大きく変化し、自給率の低下や、残留農薬、BSE問題など、食そのものの根幹が揺らいでいるのだが。

このほかにも、山に棲む動物たちに関して解説していたところ、民話の話になり、絶滅したニホンオオカミに言及したことがあった。すると「オオカミが絶滅したことを聞いて、初めて実際の動物だと知りました。伝説の動物だと思っていました」という感想文が出てきた。これについても彼女たちが育ってきた環境を考えれば無理もないことである。彼女らにとってニホンオオカミに出会えるのは、「おはなし」の中だけである。野ウサギやイノシシなど、現在でも山に生息する野生動物さえ見たことがない。日常生活の中で目にするのは、むしろ、以前

は決して見ることの出来なかった海外の珍しいペット動物だったりする。それでも、山で長年暮らしてきた古老に話を伺うと、とたんにニホンオオカミは語り部によって生命を吹き込まれ、いきいきと動き出すことになるのだが、彼女らがその古老に会う機会はまずない。

なにやら、非文字資料研究とはかけ離れたような内容になってしまったが、私がここで考えていることは、こうした現代の学生の環境に対する意識や認識に関して、本COEプログラムの研究成果が活かされないか、ということである。本COEプログラムの主要な研究テーマの一つとして、「環境と景観の資料化と体系化」が掲げられ、人々の環境に対する認識とその変化の解明が目的として据えられている。学術的な追求がCOEの中心軸であることは重々承知しているのだが、プログラム終了後のさらなる発展ということ考えた時(たためない大風呂敷を広げてみようがないが)その成果の還元先として、教育という現場を視野に入れてもよいのではないだろうか。今年度で本COEプログラムは終了する。しかし、それで非文字資料研究のシャッターが下ろされるわけではない。さらなる研究の発展と幅広い領域への成果の還元・活用が求められることになる。

文字に表現されてこなかった非文字という人類文化の継承を考えた際、その成果を研究者だけの経験として蓄積するのではなく、次世代の文化を担い培う若い学生たちへの継承を図ることも重大な使命の一つとなろう。確かに、研究そのものの継続や博物館専門職員等の育成はこれまで述べてきた問題をある程度カバーしてくれるであろう。しかし、私の個人的な望みでしかないかもしれないが、教育という現場を借りてあるいは利用することで、もっと本質的なところでの貢献が可能となるのではないか。

大学生を例に話を進めてきたが、われわれ現代人の頭の中で乖離してしまった自然環境と人間との関係、そしてその認識をどう修復し、つなげていくのか。これは人類(文化)にとって大きな課題であり、決して本COEプログラムと無縁ではない。

ある時、里地・里山に棲む生き物たちの話をしたところ、感想文に「おたまじゃくしってかえるになる途中、足がはえるって何かきもくないですか？」というものがあつた。そして、その後に「でも、自然っていいですよな」という言葉が続く。さて、これをどう考えるべきか。本COEプログラムはこの問いに対する答えを導き出す可能性を秘めている。